

子どもに「なに」が伝わったのか

大瀬 隆

一 基調報告にかえて

【新学習指導要領に向き合う体育】

二三年度からの本格実施に備え教育課程の移行期、と言うよりも先取り本格実施とも思われる報告を耳にする。何らかの改訂を体験し、いつも思うのは「なぜ改訂しなければならぬのか」「なぜ今までの問題点を明らかにすることなく、総括のない方針を繰り返すのか」？結果、現場が混乱し、ようやく軌道に乗ってきた頃に改訂を迎える：ということになる。

体育科において、今回の改訂でも幾つかの進展も見られた。例えば、四〇年以上も全国で取り組んできた「ドル平泳法」が直接的な表現ではないにしろ取り上げられていること。「呼吸をしながら初歩的な泳ぎをすること」と表記されているが、正にドル平のこと。また、鉄棒での連続技

やハードル障害走、フラッグフットボールやハンドボールなど我々が取り組んできた研究成果が取り入れられてきている。

しかし、考え方は決定的に違っている。私たちは、学校体育では「誰もがともにもうまくなる」「誰もがわかつて、できるために他者との関係性の中で能動的に学ぶ」、そのために、「基礎的運動感覚を意図的・計画的に学ぶ」ことを目的にしている。端的には、「みんなができるようになるために、みんなが大事なことを教え合い考えあう」ことで、人と人の関わりの中でわかり、できるようになっていくことと言える。

これに対し、これまで（そして今回の改訂でも）の指導要領では、他者との関係性の中でできることは無視されている。異質共同の集団学習ではなく、「個に応じた学習」のもとに、子ども達をバラバラにした個別化学習であり、技術認識に関する学び合いはなく、「友だちと励ましあって」と言った「態度」のみに触れられている。

保健分野については従来通りである。例えば、中学年での大半は自己責任というもので、健康問題は社会問題とはとらえておらず、権利についてはノータッチ。健康について心がけ主義の問題としてだけとらえるのではなく、社会との関係で考えていく必要もあるのではないだろうか。

ドル平で言う、四〇年以上もかけて取り組んできた成果が反映される一方で、相変わらずの問題点に対し、「誰もがわかってでき、伝え合う子ども」を見せていくところが早道です。確信を持って実践を展開していきたいものです。そして、我々自身も若い先生方に学び伝えていくことも忘れてはならないことだと思っています。

(共同研究者 中島 義夫)

二 実践レポートに学ぶ

1 走幅跳

中標津町立広陵中学校 齋藤 征志

はじめに

走り幅跳は、小さい頃に経験した、雨上がりの後の水たまりを跳ぶような体験が授業で活かされているのである。実際、陸上競技のルーツは生活上必要な動作が、種目になっているのであるから、古代の野を駆け、川を飛び越え、物を投げて獲物を捕っていたのと、現代の、「水たまり」があったから、飛び越えたという心理と何の代わりもないものと考えると、人間の本能としても、とても単純な種目

であると考ええる。

実際、競技としての走り幅跳は、「ヒューン」って走って、「バーン」と跳ぶ、本当に単純な競技である。どんな形であれ遠くに跳んだ人が勝つのである。

ただ、単純なだけに逆に難しく、奥の深い種目であることも間違いないのである。

1 走り幅跳の四つの局面

(1) 助走

助走のスピードで幅跳びの距離が決まると言われていますが、速ければ速いほど、踏切動作が難しくなることも確かです。中学生での授業レベルでは、後半にテンポアップして来る事だけを心がけさせることが一番重要です。

(2) 踏切

助走のスピードを活かして、より遠くへ跳ぶことができるか？という技術的な難しい局面を必要としますが、中学生の授業レベルでは、リード足を振り込むような形で膝を上前方に持ち上げるように意識をさせる。

(3) 空中動作

踏切での上体の使い方も含めて空中動作を授業レベルで見えていくと難しい技術が必要になりますが、両手を上げてバンザイの姿勢をとり胸を張ります。そこから一

気に両腕をおろして膝を胸に持つてくるように意識させます。膝を胸に持つてこれるかどうかで、着地の姿勢が変わってきます。

(4) 着地

中学生の体育での授業レベルでは、着地の仕方では30cm〜50cm変わってきます。立ったまま着地する姿勢が特に女子に多く見られますが（筋力がないこと、スピードがないことなども原因の一つ）、お尻から着地するよう意識させます。

2 四つの局面の練習方法

(1) 助走

【リズムで走る。距離としての助走ではなく、歩数としてのリズムの助走】

○後半テンポアップを心がけるために、後半の6歩を強調しながら走る

例：12歩での助走。前半の6歩で加速を付ける意識での走り。後半の6歩は足を速く動かす走りを意識。

*実際に専門的には、タ・タ・タ・タン・タ・タン（ジャンプ）というように、踏切2歩前で少しストライドが伸びるような助走がのぞましいとされている。陸上部でも難しいので、授業ではただ、テンポを速く、足を動かすことを意識させる。

① ミニハードルやラダーでの速い動き作り。等間隔で足を速く動かして走り抜ける

② 同じリズムで走れるように自分の頭の中でもしくは、ペアのパートナーが声に出して走る練習

(2) 踏切

【力強い踏切。最後の1歩を素早く踏み切り、リード足の引き上げ】

○最後の1歩が大きくなり、ブレーキをかけるような踏切が多く見られます。また、リード足の膝が上がらない踏切や踏切足を押しきる（踏切る）前にすぐに踏切足の膝をたたんでしまう踏切が多く見られます。

① リード足の膝を前方方向に引っ張るように3歩助走からジャンプ

② 3歩のリズムで①のジャンプを連続で跳ぶ↓リズムジャンプ

(3) 空中動作・着地

【いかに長く空中にいられるか。バンザイからごめんなさい】

【いかにお尻を砂場に近づけられるか。足の着地痕にお尻が：】

○踏切での腕のブロックが体を持ち上げるポイントになるが、体育授業レベルでは難しいので、腕を上上げて振

り下ろすことで、足を持ち上げる動作につなげたい。

①朝礼台など、高さのあるところから腕を上げて跳び、腕を下げる勢いで膝が胸につくような感じで足を持ち上げ砂場にお尻から着地

3 4歩助走の跳躍から授業を組み立てる

【時間】 【授業内容】 【重点または実施内容】

0 立ち幅跳び 4月の体力診断時の記録を活用

1 4歩助走からの跳躍計測 4歩のリズムを覚えさせる

2 自分の好きなところから踏切板を考えず実測するの跳躍計測

3 ○何故、4歩助走の跳躍を考えると何故、を考えさせるのに重点を置く

○助走・踏切について

4 助走・踏切について ミニハードルを使用

5 空中動作・着地について 朝礼台・跳び箱を使用

6 計測 踏切板で計測するが、実測も記録する



【4歩助走の跳躍を取り入れた理由】

走り幅跳びは、90%ぐらいが助走と踏切りで決まっています

もう程である。

生徒に「今日は助走を4歩で跳躍してもらいます」というとたいていの生徒は「エー」「そんなに短いなら跳べない」などという声が聞こえてきます。確かに走幅跳の授業としては体験のないことであるが、冒頭で書いた「水たまり」を跳び越える動作などはまさに4〜5歩、もしくは一歩程であるので、環境が変わっただけで、経験はあるのです。

さて、4歩助走にして何がわかるのか？

A型（モデル型）オーバーストライドでの跳躍

B型（天才型）しっかり踏切って跳躍

○型（ボンボン型）助走の速さに負けてしっかりと踏切れない

AB型（本能型）4歩はAで全助はB



A型は一歩が大きく、最後の1歩を踏み出す前に大きく跳んでしまつてブレーキをかけながらの跳躍↓立ち幅跳びと距離があまり変わらない

B型はしっかりと踏切って跳躍↓立ち幅跳びより大きく距離を伸ばす

○型は全助走にしたときにしっかりと踏み切れずに、踏切足に力が入らない跳躍↓4歩助走の距離とあまり変わらない距離

A B型は4歩のリズムがとれないが、全助走になると走れる↓全助走は距離を伸ばす

⇔

【じゃあ、どのような助走・踏切をしたらいいのか】

生徒が、4つのパターンから、自分の考えを出していくところから授業がスタートする。

4 本時案

《教師の働きかけ》

u p、体操

スキップ各種の指示

20 mダッシュの指示

○記録の違いを感じ、自分の課題を見つけよう

*発問1：50 m走・立ち幅跳び・4歩助走跳躍・全助走跳躍の記録をまとめました。この記録表を見て気がつくことを答えて下さい。

記録を確認しながら確かめる

立ち幅跳と4歩助走で記録が変わらない

4歩助走と全助走と記録が変わらない

助走が伸びてくると記録が伸びてくる

助走が伸びても記録が下

がっている人もいる

50 mが速い人が遠くに跳んでいることが多い

《留意点》

・課題を把握し自分の記録、他の人の記録の違いを考える

・記録を見て自分の考えを自由に発表

*発問2：この記録を見て、実際に走幅跳で遠くに跳ぶためには、何が必要だと思いますか

生徒の意見に説明を加えな ①走るスピードがら話をする ②助走距離があつた方が跳ぶ

①②立ち幅跳と、助走を付

けたときの記録を見たとき ③立ち幅跳で遠くに跳んで立ち幅跳の記録が一番の いる人の方が、距離が長人は一人もいません い

*発問3：立ち幅跳の跳躍と4歩助走での跳躍であまり記録が変わっていない人がいますが、これは何故ですか

オーバーストライドスピードの減速を知る

《留意点》

・スピードの大切さと踏切の力強さを考えさせる

*発問4：4歩助走での跳躍と全助走での跳躍であまり記録が変わっていない人がいますが、これは何故ですか

スピードを活かしていないことと力強い踏切ができていないことを知る

長い助走が必要かどうか疑問を持たせる

○スピードを活かして力強く踏切るにはどうしたらいいか？

【今後の指導課題】

#スピードを上げるためには全力で走ること

#力強く踏切るなら力を入れる

⇔

生徒の知識なら、これが最高の答えである。が、しかし、これでは意図する授業にならない。今回は「後半のテンポアップ」「スムーズな踏切り動作の習得」が、教師側からの授業の組み立てになってしまっている。↓いい発問の聞き方があるのでは

●氏の表現を借りるなら『人間の本能的・生活上必要な動作』といえる『4歩』に着目し、助走と（から）踏切りに意識焦点をあて、生徒がそこに自らの課題を見つけて学習することを狙いとした実践である。

計測（2年生、男子29名・女子46名）の結果から、氏は立ち幅跳びと距離があまり変わらない（A型）が、男子20%女子40%であったこと、さらに4歩助走の距離とあまり変わらない（O型）が、男子28%であったことを注視し、『全力走からの踏切りの難しさをテンポアップでクリアさせる。そのために助走から踏切りを練習させる時間を確保したい』とまとめている。

しかし、『記録低迷型』としているのは、男子2名・女子1名であり、充分次の実践につながる指導内容と判断でき

2 学年のテーマを意識した体育の授業

↳バスケットボールの授業から

檜山・江差町立江差中学校 白山 尚

はじめに

江差町は渡島半島南西部檜山管内にあり、人口約9800人で、主な産業は漁業と農業となっている。年々人口の減少が止まらず過疎化の一途をたどっている。毎年8月には北海道でも古いお祭りにあげられる姥神神宮祭、9月には江差追分全国大会がおこなわれるこの時期は多くの観光客で賑わいを見せる。江差町立江差中学校は、生徒数17

1名(1年生3学級・2年生2学級・3年生2学級・特別支援2学級)、教職員22名の学校である。生徒は南が丘小と江差小を卒業して本校に入学してくる。生徒は基本的には温厚であり、学校も落ち着いている。多くの生徒は8月の姥神祭典に力を注ぐ。

P.T.Aでは「親父の背中」というお父さん方の集まりを組織し、壁のペンキ塗りなどの学校環境整備に多大な力を發揮している。

1 新入生を迎えて

卒業生をだし、今年度は1年生の副担任、学年部長となつた。各担任とともに新1年生への指導の方針を話し合った。「二人一人が大切にされる」「挨拶など礼儀をきちんとさせよう」「当たり前前かが当たり前にできる」「教え込むことと考えさせることを区別しよう」など大きな方向性をだし、次に具体化するにはどうするかを話し合った。

【学年目標(学年テーマ)】

○5つのそう(想・創・奏・爽・走)

想：相手の気持ちを察しよう。

創：みんなで学級や行事を創り上げよう。

奏：思いを語り認め合いあたたかい雰囲気を作り上げよう。

爽：いつでも元氣よく爽やかな挨拶をしよう。

走：何事にも一致団結し、目標に向かって突き進もう。

2 学年テーマを意識した体育の授業づくり

今年の1年団の話し合いの中から、5つのソウをテーマに掲げ生徒に指導していこうということになった。

担任や学年団の先生方から5つのソウにふれてもらいながら生徒に話をしていただいた。行事にむかう時、取り組みの中で問題がおきてしまった時など、この5つのソウのどれかのソウに絡めて話をしていただいた。

そういうこともあり、5つのソウを前提にしながら体育の授業ができないかと考えた。特に、生徒の実態からいろいろ考えを持っているのに人前で発表できなかったり、言葉足らずで誤解を生じたりすることが多かった。少しでもこれらを解消できないか。学級で取り組むことはもちろんのこと授業でも関って現状を変えていきたいという思いがあった。特に体育では奏と走の2つを重点に取り組んでいく。

そこで取り入れたのが、「つながり心電図」である。これはゲームの中でバスのつながりやシュートを誰がどのくらいおこなっているのかを記録し、そのチームに一言コメントを付していくものである。それらのコメントを反省材料として次回のゲームに生かすモノである。この心電図を介して人とのつながりや、ゲームを分析する力を育てたい

と考えた。

3 バスケットボールの指導計画

(1) 目標：互いにコミュニケーションを取りバスケットの楽しさを味わう(奏)

安全を確認しながら一生懸命運動しよう(走)

(2) 生徒：一年生、3クラス(各クラス24名)、男子13名、女子11名。

(3) 指導計画：13時間

オリエンテーション	1	シュート練習	2
ドリブル練習	2	2対0の攻撃	2
2対1の攻撃	1	ゲーム	4
実技テスト	1		

4 シュート調査

生徒に聞いてみると小学校でもバスケットボールをおこなっているということで、シュート調査を実施してみた。各自A～Eの5つのエリアで1エリア5本シュートし、何本成功したかを調査した。シュートについてはボード利用など一切ふれずにおこなわれた。結果は以下の通りになった。

シュート総数	330本	エリア	成功数	成功率	
f	スロー	左0度	A	55	16%
		左45度	B	51	15%

	正面	C	25%
右45度	D	75	23%
右0度	E	62	19%

予想としては、エリアB及びエリアDのシュート率が良いのではないかと思ったが、生徒のシュートを見る限り、バックボードをほとんど利用せず、直接リングをねらうシュートが大部分であった。(注：結果はレポートより作表している)

5 (パス) つながり心電図

一年生は4班できるので男女混合班(生活班)とし、3対3で試合時間3分でおこなった。その後、男女別にできるだけの力が均衡するように生徒に班を組ませ、5対5でおこなった(少ない人数にあわせておこなうこともあり)。

心電図のとり方は、生活班の時は出ない班員が実況と記録を担当し、男女別班の時は男子のゲームを女子が担当(女子のゲームはその逆)する。

6 考察と生徒の様子

【教師】

* ボールをもらったときに次に何をするかという予測判断が不足している。

* ボールをもらってからパスする相手を探す事が多い。また、ドリブルの技術が未熟なため積極的に使おうと

しない生徒が多くみられる。

* ノーマークにもかかわらずドリブルからレイアップシュートへつなげる生徒が少ない。これはシュート率の低下を招く。

* 事前におこなったシュート調査で自分のシュート位置をつかませたが、そこへ意識的に入る生徒は少ない。

* ボールを特定の者に運ばせシュートに結びつくことが多い。

【生徒】

* 生徒の分析については、一面的にししか捉えることができずにいた。これは教師の指導が不十分であったと考える。どんな点を観察してどう書くかという視点の明示が必要であった。

* 質的には低いですが、班で分担して観察したこと、気づいたことを伝えることはできた。

●氏は、『平等に役割分担をし、上手い生徒もそうでない生徒もゲームに出て、記録をとることができた』『つながり心電図については、良く書けていると思う。3分間という試合時間が限界と考える』とまとめていた。これらの点は、目標としていた「奏や走」が伝わったものであり、他の3つのソウをも取り込んだ実践といえる。

ここで、「2対0と2対1の攻撃」の質的つながりを一考したい。それは、「防御側の1」の意識内容であり、①ボール保持者を守る第一線のか、②ボール保持者ともう一人の攻撃者に対する第二線のか、との視点である。この意識化は、次に攻撃側のポジション練習に入ったとき、守りの視点を攻めの視点に転化させる可能性を含んでいる。即ち、オーバーナンバーでの攻撃練習には、守備練習も含まれていると指摘できる。

3 わかってできる、そして伝え合う！

根室・中標津町立養老牛小学校 中島 義夫

【ラケットボールⅡ】

◆昨年につづぎ

昨年度に発表したラケットボールは低中学年だけでなく、高学年でもレク的に何度か取り組み、楽しむことが続いてきた。兄弟学校との交流学习や複式校での集合学習でも取り上げ好評を得ていた。体育の授業では、今年も取り組むことにし、ラケットからの発展を試みてみた。

◆レベルⅡ

ルールは同じだが、用具を軟式テニスラケットから硬式ラケットに。ボールもソフトテニスから硬式テニスボールへと変えて行った。また、コートも体育館ではなくグラウンド

ドにした。レベルⅢへの繋ぎであったが、子ども達は違和感なく硬いボールでも恐怖感なく取り組んでいた。そこで、2時間ほどで次の段階に入ることにした。児童は、この段階から全校15名（5人組3チーム）での授業とした。

◆レベルⅢ

いよいよ最終章。ソフトボールだが、最初はボールだけ硬式テニス用を使っていた。2年生はラケットも可とした。それで1時間行つてから全てソフトボールの用具を使つて5時間の授業を行った。最初はグラブの使い方が初めてなので感覚練習の段階を入れて行い、打撃もバントグリップでのスイングから練習していった。もちろんゲームも毎時間繰り入れた。ルールは以前と同様である。

*3チーム分割方式（攻撃1、内野守備1、外野守備1のローテーション）

*三振なしの全員攻撃（一回りか二回り）

*守備得点（アウトに関つたチーム全てに）

◆何と：ゲームになつている：

ソフトボールだと、きつとボールを怖がる子も出てきてゲームが成り立たないかと思いきや、何と守備でもアウトが結構続出し、ライトヒッティングや守備位置での工夫も出来、高学年を入れた成果も表れていた。高学年でもボールが苦手な子もアウトを取るなど大盛り上がりであった。

◆野球文化は：

しぼんできていると言われてきたが、WBCや日ハム効果なのか。ましてや、山の小さな学校ではベースボール型授業を行うことすら困難である。現に、同じ複式校ではできる環境にないと言う。しかし、昨年来の工夫をしていけば十分授業が成立し、しかも大きな成果をあげることができ。ラケットボールからソフトボールへ繋げる授業変遷でわかつたことを、以下にあげてみる。

*打撃やゲームの楽しさをどの子も感じること

*投げる受ける感覚を、素手で小さな頃からつけさせること

*スイングではラケットが効果的な腰の捻りを体感できること

*毎時間のゲームを通して複雑なルールが理解できたこと

そして、なによりも、「打つた、捕れた、アウトにできた」ことが大きな意欲の元になると言える。

最後は職員と子ども達で交流試合を行い、みんな大満足して終えた。結果は、子ども達の逆転勝利（おまけ）でした！

●ゲームの記録を見ると、ゲーム時間（イニング）に差があること、また攻撃回数が1〜2回で得点が違うことな

どで一樣には分析できない。しかし、守備得点がどのインングにもあること、そして最後のゲームでは3チームとも攻撃得点よりも守備得点が優っていること、が特筆できる。これは、「守備得点で教えたいこと」が有効に働いたものといえる。即ち、内野守備での「フォースプレー」や外野から内野への「バックホーム」などの連係プレーが、ゲームの中で獲得されたものと考えられる。

『9人(7人)×2チームでなければソフトボールのゲームはできない』のではなく、『インング方式、攻撃・内野・外野』に着目し、其々での『連係』を教師が解らせ、子ども達が伝え合った実践といえる。

4 体育科学習指導案

札幌学院大学 こども発達学科 木村 志穂

1 単元名「リレーのタイムを縮めよう」

2 児童の実態

全校児童□名、本学級4年□組は男子16名・女子17名であり、非常に元気が良く、活発に活動する学級である。困っている子がいると、皆で助け合っている場面を多く目にする。

3 視点にかかわって

【視点1】：「あれ？」が生まれる教材化

a. カーブと歩幅

子どもたちは、できるだけ距離を速く走ろうと考えている。そのため、カーブではコーンに近い場所、歩幅は常に大きくという考えを持っている子が多い。しかし、試走するなかで「あれ？走りにくいな」と感じる。本当にその走り方が速いのかと問われると、「カーブではゆるめにカーブでは歩幅は小さくした方が速い！」という意見があり、「あれ？その方が速く走れるのかな」と理解していく。

b. バトンパス

個人的に速く走れるように、ポイントの練習を行った後、次はチームとして速く走る練習に移る。チームで協力し合うためには、バトンパスが大切であり、「バトンの受け渡し・受け手の走り出すタイミング」を工夫しようと進展させていく。その過程で、走ることが得意な子、苦手な子の存在に目を向け、走る距離をバトンパスで調整していくことに意識を向けさせていきたい。

【視点2】：問題解決を支える教師のかかわり

a. 活動の意欲を持たせるために

子どもたちは、他のチームとの順位を意識してしまい、「1位だからうれしかった」「3位だったからつまらなかった」と思う傾向がある。本単元では「チームでのタイムの縮み」を意識してもらいたいため、本時ではチームで何

秒縮められるか予想を立てさせる。

そして、グループ練習の中で「速くなった」感覚がつかめるようにアドバイスしていく。また、グループ練習の中で、うまくいっていることを見つけ、声をかける。その内容を全体での話し合いで取り上げていく。

◆「予想に近かった!」「〇秒も縮まった!」「どうしてそんなに縮まらなかったのかな」との視点を持たせ活動に取り組ませたい。

b. 練習のポイントを意見交換

練習の過程や計測後に集合し、「どこに注意したのか・発見したポイント」などをチームごとに発表させる。

◆「なるほど、自分たちのチームでもやってみよう!」

「こうやったら、タイムは縮まるかな」と感じ、さらに工夫してこういう意識を持たせていきたい。

4 単元の目標

《技能》：(1)コーナリングでの回るコースがわかり、直線とコーナリングでの歩幅の違いを意識して走ることができる。

(2)テークオーバーゾーンをチームの作戦として活用し、バトンパスができる。

《態度》：練習課題に進んで取り組み、チームメンバーを応援し合い、走ることが苦手な子をチームでサ

ポートすることができる。

《思考 判断》：個々のタイムが縮まるよう技術ポイントを理解し練習の方法を知り、グループで共同した練習を行うことができる。

単元構成(3/3)

【学習活動の流れ】

(1)*準備体操：うしうまゲーム(w-u-p) 10分

*リレー計測①

「もつとタイムちぢまるかな?速く走るコツは?」

〔カーブ〕 〔歩幅〕 〔バトンパス〕

〔うでふり〕 〔走るきより〕

*リレー計測②

「カーブがむずかしい!」

*ふり返りカード記入

40分

(2)*準備体操：おにごっこ(w-u-p)

10分

*リレー計測③

「カーブ・歩幅をチームごとに練習しよう!」

〔カーブはゆつたりと〕 〔カーブでは歩幅小さく〕

〔直線では歩幅大きく〕

*リレー計測④

「もつとちぢめるためには、チームでできることは」

⇒

バトンパス(確実なパスでチームワーク)

*ふり返りカード記入

40分

5 本時の展開

《目標》

○バトンパスでよりタイムを縮めるために、どのようにしたらよいかを考え、協力して練習することができる。

○走るのが苦手な子をサポートする方法を発見し、チームとして作戦を考え、実走することができる。

【学習活動の流れ】

【教師のかかわり】

◆前時まで、速く走る方法を理解し、カーブ・歩幅の課題練習を行ってきた。本時ではさらに、バトンパスに注目し、リレーは、カーブ・歩幅・バトンパス(チームワーク)でタイムを縮めることができることを理解させたい。

*準備体操・うしうまゲーム

*チームごと、今回何秒縮めることができると予想を立てる
とができるか予想を立てる
(5秒かな)(いや!10秒だ!)
むよう、目標タイムをを立てさせる

*リレー計測⑤

「バトンパスを練習しよう」

「スピードののってパスする」 グループ練習を観察
「確実にわたして落とさない」 し、アドバイスする
「もうらう場所をかえてみたら?」

*チーム活動

A t前をむいてダッシュする 意見交流ができるよ
B tもうらう場所をそれぞれ変える う集合させグループ
C tもうらう人・わたす人はかけ声 ごとに聞いていく
を出す

*リレー計測⑥

(ちぢまった!)(□秒速くなった)

(バトン失敗した:)

みんなで拍手し合う

「リレーのタイムをちぢめるためには:」



「カーブ・歩幅・バトンパス(チームワーク)が大切だ」

○チームワークの内容は、①個々として確実にスピードに乗ってパスすること、②得意な人・苦手な人の役割を考えたリレー順を考えること、と捉える。

《留意点》:目標としていた「縮めるタイム」への評価は、

「少しでも前回より縮まっていればよい」ことをを基本にし、「もっと練習の時間を増やすこと」でタイムアップが計れると、前向きに捉えさせる。

《参考文献》 小学校学習指導要領解説 体育編2008

文部科学省

体育科教育 2009 大修館書店

〔資料〕①ふり返りカード(1/3時)より

②ふり返りカード(2/3時)より

③計測タイム(秒)

	A	B	C
計測①	2・19	2・01	2・23
計測②	2・16	2・02	2・18
タイムの縮み	↑3	↓1	↑5
計測③	2・20	2・11	2・13
計測④	2・24	2・16	2・10
タイムの縮み	↓4	↓5	↑3
計測⑤	2・06	2・05	2・11
計測⑥	2・08	2・06	2・11
タイムの縮み	↓2	↓1	0

●教育実習における研究授業の実践である。よって、子ども達の具体的な記述内容は、本稿では割愛している。附された資料を概括すると、1/3時ではカーブに関する記述が65%、バトン・腕ふりに関してが6%である。また2/3時では、カーブに関して70%、バトン10%、歩幅7%の内容である。

そして、3/3時では、バトンパス練習を活動の中心に位置づけ、チームワークの質的理解を重ね、授業当初のタイムからの向上は大といえる。

授業参観者が多い緊張感のなかで頑張った子ども達、さらに実習指導に携わられた諸先生に感謝の意を表します。

三 まとめにかえて

研究会へ向けてのレポート準備。テーマを絞り、計画案を練り、実践し、定型型に準じてまとめる。日々の教育活動の中で。本年度では、『走幅跳、バスケットボール』の報告が範となろう。

さて、『中島報告』は、「小さな学校での7年目の成果」との副題が附されている。示した『ラケットボール』の他に、『跳び箱・水泳』の実践がまとめられている。それらは、型にとらわれたレポートではなく、児童と教師のやりとりや活動の熱気が伝わる『書物』である。本稿では、昨年度からの継続報告との意から一つに限って紹介したが、「文学としての実践記録・授業記録風実践記録」(小林 篤、体育科教育1991・6)を残したいものである。それは、出席簿の端の余白に小さくメモされているのでは。そして、『1977北海道の教育』まで遡ってみたが、「教育実習の授業レポート」は見出すことができなかった。

(札幌学院大学)